

〈研究ノート〉

外国人留学生に対する支援体制の構築

ーチューター制度に関するアンケート調査結果からの検証ー

大塚 薫

要 旨

本稿は、外国人留学生に対する支援体制の支柱であるチューター制度を外国人留学生及びチューターの両者に行ったアンケート調査から検証したものである。

高知大学国際連携推進センターでは、2004年度から始まった第1期中期目標・中期計画の期間において、チューター制度の見直しを2006年度に行い、2006年度第2学期から①チューター対象オリエンテーション出席の義務化、②チューター登録制度の構築、③チューター業務連絡票の作成・活用、④チューター対象留学生の拡大、2008年度から⑤チューター指導計画書及びチューター活動報告書の提出の徹底、⑥チューター業務実績簿の改善等を行ってきた。そして、2010年度からの第2期中期目標・中期計画の期間においては、第1期で構築したで制度を引き続き徹底して実施するとともに、2011年度から⑦チューター講習会の実施、2014年度に⑧チューターガイドブックの作成を行い、チューター対象オリエンテーションで配布し、チューター活動の質の向上に努めている。

このようなチューター制度の改善を通して現行のチューター制度を検証し、今後の課題について述べていく。

【キーワード】

外国人留学生、チューター制度、支援体制、アンケート調査

0. はじめに

1983年に21世紀初頭に留学生を10万人受け入れるという「留学生受入れ10万人計画」が日本政府により提言された。この年にASEAN諸国を歴訪した中曽根元首相が、経済的に先進諸国に追いついたという自負があったものの、受入れ体制が未整備であることを実感し、当時経済力が強いと思われていたフランスの留学生受入れ数を参考に10万人という目標数値を立てたとされる。目標数値を追いかけるあまり、受入れ体制の未整備や留学生の学力低下等の問題も生じたが、2003年に留学生数が10万人を超え、その目標は達成さ

れた。

その後、2008年には「留学生30万人計画」が策定された。「留学生受入れ10万人計画」時は、「開発途上国の人材養成」、「教育・研究水準の発展」、「人的能力の開発」、「帰国留学生を通じた諸外国との友好関係の強化」が目的であったが、「留学生30万人計画」では、「高度人材の確保」、「諸外国への知的国際貢献」、「日本での就職支援」等が目的とされた。福田元首相の「産学官連携による海外の優秀な人材の大学院・企業への受入れの拡大を進め」との方針の下、文部科学省等関係省庁により「留学生30万人計画」骨子が発表された。そこにおいても、留学生が安心して勉学に専念できる受入れ環境づくりとして地域、企業を巻き込んだ交流の支援、日本語教育の充実、カウンセリング等の生活支援、宿舍の整備、専門的な受入れ組織体制の強化、就職支援等が挙げられている。

外国人留学生への支援の一環であるチューター制度は、1980年代から推進された文部省(現文部科学省)の留学生受入れ推進政策の中で早い時点で制度化された。チューター制度は、渡日して間もない外国人留学生に対して、アドバイザー(指導)教員の指導の下に、在學生(チューター)が一定の時間を割いて教育・研究について個別の課外指導を行い、留学生の勉学・研究効果の向上を図ることを目的としている。このような経緯から、チューター制度は、留学生の生活や学習の適応支援の一つの柱として活用されており、大学の留学生の受入れ支援体制の一環として機能している。

1. 高知大学におけるチューター制度の概要

高知大学には、2016年5月1日現在、21か国・地域から146名の外国人留学生が在籍している¹⁾が、学位を取得するために在籍している正規生や協定校からの交換留学で単位を取得するために来日した特別聴講学生(交換留学生)、大学院に進学するために勉学に励んでいる研究生等身分が異なっている。このように、留学生は身分や出身、専門は様々であるが、慣れない日本での生活に適用しようと日々努力するとともに、日本滞在中に心から信頼し合える日本人の友人を作りたいと考えている。

高知大学では、チューター制度として学期中に主に学習指導を行う個別チューターに加え、渡日時チューターを置き、入学直後の留学生がスムーズに日本での生活が送れるようサポートをしている。チューターは、多くの留学生にとって日本の大学に留学し、1対1で付き合える最初の友人としての

役割に加え、日本人学生並びに留学生間の異文化理解のきっかけになり、教育的意義も大きいとされている。

高知大学では、国際連携推進センターが一括してチューター制度の運営・構築を担っている。2004年度から始まった第1期中期目標・中期計画の期間において、チューター制度の見直しを2006年度に行い、2006年度第2学期から①チューター対象オリエンテーション出席の義務化、②チューター登録制度の構築、③チューター業務連絡票の作成・活用、④チューター対象留学生の拡大、2008年度から⑤チューター指導計画書及びチューター活動報告書の提出の徹底、⑥チューター業務実績簿の改善等を行ってきた²⁾。

そして、2010年度からの第2期中期目標・中期計画の期間においては、第1期で構築したチューター制度を引き続き徹底して実施するとともに、2011年度から⑦チューター講習会の実施³⁾、2014年度に⑧チューターガイドブックの作成を行い、チューター対象オリエンテーションで配布し、チューター活動の質の向上に努めている。

本稿では、このようなチューター制度の改善を通して、2012年度第2学期から2015年度までの高知大学のチューター制度を概観するとともに、現行のチューター制度においてチューター及び留学生に活動終了後に実施したアンケート調査の結果を検証し、今後の課題について述べていく。

2. 高知大学におけるチューター活動の概要

高知大学におけるチューター制度は、本学に在籍する外国人留学生(学部生は入学後2年間、大学院生・特別聴講学生等は1年間)に対して、アドバイザー(指導)教員の指導の下、大学等が選定した「チューター」により、教育・研究について個別の課外指導を行い、留学生の学習・研究効果の向上を図ることを目的としている。チューターの役割としては、主に教育・研究支援であり、生活支援としては入学後の留学生活がスムーズに送れるようにサポートする渡日時チューターを別途設けている。そのため、「渡日時チューター」と学期中に学習の支援をする「個別チューター」は完全に住み分けられ、後者の活動はあくまでも教育・研究の課外指導が中心となる。学期中に学習指導を行う個別チューターは、主に日本人の上級学生が担当し、第1学期は4月から8月初旬までの4ヶ月間、第2学期は10月から翌年の2月初旬までの4ヶ月間が活動期間で、週に1、2度定期的に会い学習のサポートを行うよう指導している。2015年度現在、1学期間に最大20時間の活動枠が設

けられているが、活動の頻度や回数及び内容に関しては各チューター及び留学生並びにアドバイザー教員の計画と裁量に委ねられている。

チューターの選定方法としては、アドバイザー教員が留学生と同じ研究室に所属する上級学年の日本人学生を選定することになっている。しかし、適当な学生がない場合、アドバイザー教員から国際連携推進センターに選定が依頼され、当センターに登録しているチューター候補者で留学生より上級学年で専門が一致する学生が選ばれることになっており、実際に各学期に数名の候補者だった学生がコンスタントにチューターとして活動している。

また、チューターは活動を開始する前に、年に2回、各学期の初めに具体的な業務内容や注意事項が説明される「チューター対象オリエンテーション」に出席する義務があり、チューター候補者もオリエンテーションに参加することでチューターに選ばれる資格が得られる。オリエンテーションでは、『チューターガイドブック』を配布し、チューターには、大学規定の謝金が発生するので、責任感を持ちチューター活動に励み自らが異文化について理解するきっかけとなるよう説いている。さらに、チューター対象オリエンテーションでは、チューター活動の主要な業務内容が勉学・研究の個別指導であることを徹底させた上で、1学期間の具体的な「チューター指導計画書」を作成しチューター活動を開始する前に提出するよう指導している。これは、チューターと留学生がチューター活動を始める前に、話題を共有することでアイスブレイキングの役割を果たすとともに、留学生のニーズをチューターが把握するのに役立っている。

実際に、チューター活動を開始してからは、1か月ごとにチューター活動の業務内容を記入する「チューター業務実績簿」を提出することになっている。「チューター業務実績簿」には、「1か月のチューター指導活動を振り返って、問題点、指導上困難だった点、良かった点、うまくいった点等」を記入する欄があり、何か問題があった場合はそこに記入し、留学生担当窓口の担当者へ提出するよう指導している。

そして、チューター活動が終了した際には、チューター活動完了報告の書類とともに「チューター活動報告書」として自分の1学期間のチューター活動を顧みてアンケートを提出してもらっている。同時に、留学生に対しても日本語と英語が併記されている「チューター活動報告書」に回答してもらっている。両者とも「チューター活動報告書」には氏名を明記してもらい、それぞれのチューターと留学生の組み合わせに問題がなかったか、チューター

制度の運用がスムーズに行われているのかをチェックする指標としている。

2011年度からは、「チューター対象オリエンテーション」に加えて1年に1度、学期の半分が経過したところで「チューター講習会」を開催している。これは、チューターと留学生がともに参加し、「チューター活動の現状と課題」を国際連携推進センターの教員が説明した後、両者混合の4、5人のグループに分かれて「チューター業務の問題点」に関する話し合いを行っている。そして、外国人留学生が求めているチューター指導や日本人学生にとってのチューターの意義について考えさせるようにし、残り半分のチューター活動がスムーズに行えるよう促している。

以上のように、2006年度からチューター制度の改善を行ってきたが、チューター活動が留学生の学習及び生活への適応支援として機能しているのかについてチューター活動の時間数に対する満足度に焦点を当てて検証していく。2010年度からは予算の関係上、段階的にチューター活動の時間数が減少してきたが、それに伴い、チューター活動の質の低下が招かれていないか、チューターの指導内容やチューター活動の問題点についてもチューター終了後のアンケート調査結果から明らかにしていく。

3. 2012年度第2学期から2015年度におけるチューター活動の実施状況

2012年度第2学期から2015年度におけるチューター制度の実施状況を指導時間数及び指導内容の面から概観していく。なお、必要に応じて前回までの2004年度から2011年度までの調査と比較しながら考察する。

3.1 指導時間数の変化について

表1には2012年度第2学期から2015年度にかけての渡日時チューターの指導時間数の変化が示されている。この表から留学生の増減にかかわらず、渡日時チューターの留学生一人当たりのサポートの時間数が一定の低い水準で安定していることが読み取れる。これは、2010年度までは一人のチューターが一人の留学生を担当してチューター活動を行っていたが、2011年度からは留学生の出身大学ごとに一人のチューターが対応することにし、数名をまとめてサポートするようにしたためである。また、主に特別聴講学生(交換留学生)においては、渡日推奨日を設け、官公庁での手続きも複数の出身大学の学生を一緒に支援することにしたことが、一人当たりのサポートの時間数の減少に結びついている。そのため、年々、留学生一人当たりの指導時間数

は減少の傾向が見られる。

表1. 渡日時チューターの指導時間数の変化(年度別)

	2012年度	2013年度		2014年度		2015年度	
	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期
チューター(名)*	14 (12,2)	6 (4,2)	7 (3,4)	4 (2,2)	3 (2,1)	3 (1,2)	11 (9,2)
留学生(名)	33	22	22	13	6	7	42
時間数(H)	249.5	86.5	105	62	49	36	147
留学生一人当たりの 時間数(H/名)	7.6	3.9	4.8	4.7	8.1	5.1	3.5

*チューターの内訳として()内に日本人学生、留学生の順で記す⁴⁾。

表2は「チューターの一人当たりの平均指導時間数」を学部別に見たものである。チューターの最大活動時間枠は予算の関係上、徐々に減少している。2004年度から2009年度までのチューターの最大活動時間枠は40時間であったが、2010年度に30時間に減少し、2011年度からは20時間から25時間と設定されている。

2012年度第2学期から2015年度までの各学部の7学期間の一人当たりのチューター活動の平均時間は、人文学部は14.6時間、教育学部は14.1時間、理学部は14.3時間、医学研究科は16.8時間、農学部は16.2時間、土佐さきがけプログラムは13.6時間、地域協働学部⁵⁾は8.9時間であった。前回までの2004年度から2011年度までの調査と同様、文系(人文学部・教育学部・土佐さきがけプログラム・地域協働学部)と比較し、理系の医学研究科・農学部のほうが比較的活動時間が長い傾向にあった。これは、文系の学部の留学生は正規生に加え、協定校からの日本語を専門として勉強している短期の特別聴講学生(交換留学生)の在籍が多い一方、理系の学部は、大学院生を中心とした正規生の所属が多いためである。前者は渡日直後の学内外の煩雑な手続き以外の専門の学習はそれほど必要とせず、後者は専門と直結した研究指導のサポートが中心となる。

なお、理学部は活動時間が14.3時間と文系の学部と同等の傾向にあるが、毎年協定校から日本語を専門としている特別聴講学生3名を受け入れていることが影響していると考えられる。

表2. チューター一人当たりの平均指導時間数 (学部別)

留学生の 所属学部	2012年度 (総時間数・チューター数)	2013年度 (総時間数・チューター数)		2014年度 (総時間数・チューター数)		2015年度 (総時間数・チューター数)		平均
	2学期*(25)	1学期*(25)	2学期**(20)	1学期*(25)	2学期*(25)	1学期**(20)	2学期**(20)	
人文学部	25.0 (600/24)	15.3 (322.5/21)	14.3 (258/18)	15.2 (320.5/21)	16.9 (354.5/21)	7.5 (90/12)	8.1 (72.5/9)	14.6 (2018/126)
教育学部	25.0 (650/26)	12.7 (307/24)	13.3 (266.5/20)	14.3 (214.5/15)	12.9 (233/18)	9.3 (168/18)	11.0 (231.5/21)	14.1 (2070.5/142)
理学部	25.0 (275/11)	11.4 (80/7)	7.5 (30/4)	5.0 (10/2)	12.2 (36.5/3)	12.5 (50/4)	7.8 (47/6)	14.3 (528.5/37)
医学研究科	25.0 (25/1)	—	—	—	25.0 (25/1)	6.0 (6/1)	11.0 (33/3)	16.8 (89/6)
農学部	25.0 (50/2)	25.0 (75/3)	15.9 (95.5/6)	2.0 (2/1)	17.3 (172.5/10)	12.1 (60.5/5)	—	16.2 (455.5/27)
土佐さき かけ	25.0 (25/1)	11.0 (22/2)	—	15.7 (31.5/2)	15.3 (91.5/6)	5.8 (17.5/3)	14.8 (44.5/3)	13.6 (232/17)
地域協働 学部	—	—	—	—	—	—	8.9 (44.5/5)	8.9 (44.5/5)
合計時間 (延べ人数)	1625.0 (65)	807.0 (57)	650 (48)	578.5 (41)	913 (59)	392 (43)	473.0 (47)	

*2012年度第2学期、2013年度第1学期、2014年度第1・2学期は、チューターの最大活動時間枠は25時間である。

**2013年度第2学期、2015年度第1・2学期は、チューターの最大活動時間枠は20時間である。

3.2 チューターの週当たりの活動回数及び時間数

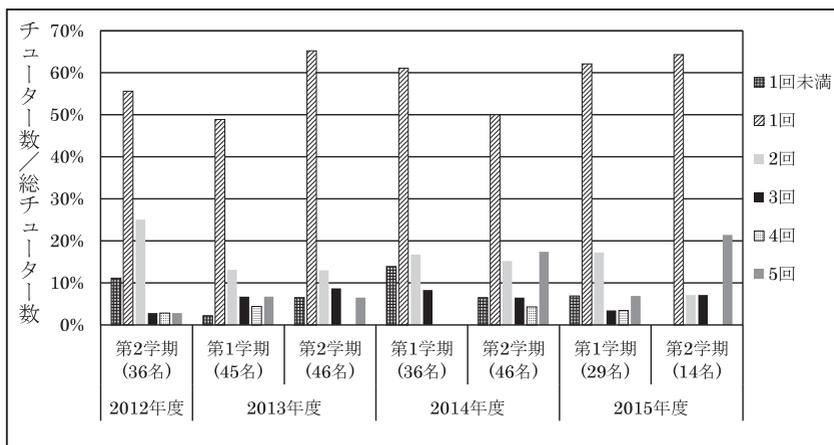
表3及びグラフ1は、チューターの週当たりの活動回数を調査したものである。いずれの学期も週1度活動すると回答したチューターが最も多く、次に全体の平均から概観すると、週に2回、週5回と続く。

最大活動時間枠の時間数に応じて見てみると、最大活動時間枠がそれぞれ40時間、30時間に設定されていた2010年度第1学期及び2010年度第2学期は、週1度活動している割合が4割程度に対して週2度の割合が3割程度を占めていた。しかし、20時間に減少した2011年度以降は週に1度の活動が圧倒的に多くなり、2011年度以降は約半数が週に1度活動していることが分かる。

また、前回までの調査と同様、週5回の活動をすると回答したチューターが一定の割合を占めているが、チューターの学部を見てみると、実験を伴う農学部や医学研究科の学生であった。このことから、研究室において研究や実験指導のサポートを行う農学部や医学部では、活動時間枠内ではチューター活動が収まっておらず、かなりの時間を無償でサポートしている実情が浮かび上がった。

表3. 週当たりの活動回数 (チューター)

年度(人数)/回数	1回未満	1回	2回	3回	4回	5回
2012年度第2学期 (36名)	4 (11.1%)	20 (55.6%)	9 (25.0%)	1 (2.8%)	1 (2.8%)	1 (2.8%)
2013年度第1学期 (45名)	1 (2.2%)	22 (48.9%)	14 (31.1%)	3 (6.7%)	2 (4.4%)	3 (6.7%)
2013年度第2学期 (46名)	3 (6.5%)	30 (65.2%)	6 (13.0%)	4 (8.7%)	0 (0.0%)	3 (6.5%)
2014年度第1学期 (36名)	5 (13.9%)	22 (61.1%)	6 (16.7%)	3 (8.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
2014年度第2学期 (46名)	3 (6.5%)	23 (50.0%)	7 (15.2%)	3 (6.5%)	2 (4.3%)	8 (17.4%)
2015年度第1学期 (29名)	2 (6.9%)	18 (62.1%)	5 (17.2%)	1 (3.4%)	1 (3.4%)	2 (6.9%)
2015年度第2学期 (14名)	0 (0.0%)	9 (64.3%)	1 (7.1%)	1 (7.1%)	0 (0.0%)	3 (21.4%)
平均	2.6 (7.1%)	20.6 (57.1%)	6.9 (19.0%)	2.3 (6.3%)	0.9 (2.4%)	2.9 (7.9%)

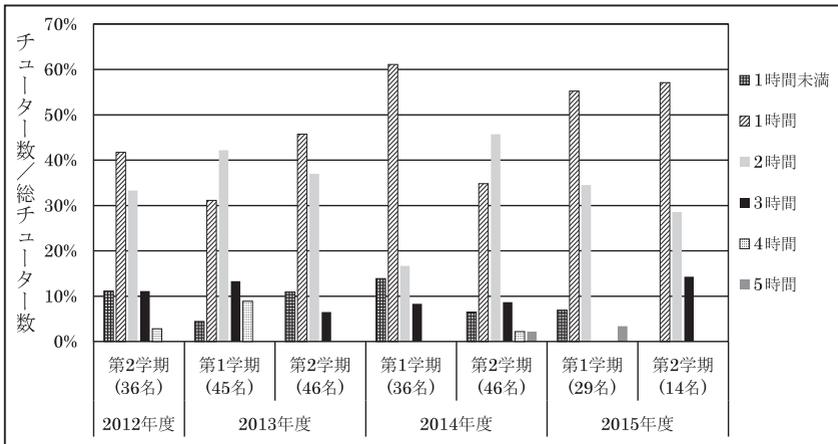


グラフ1. 週当たりの活動回数 (チューター)

表4及びグラフ2は、チューターの週当たりの活動時間数を示している。全体を概観すると、チューターの活動時間数は週に1時間から2時間の割合が約8割を占めている。活動時間枠が比較的多かった2010年度は週2時間の活動時間数が最も多く4割以上、週1時間の活動が2割程度を占めていた。しかし、2011年度は逆転し週1時間の割合が週2時間の割合よりも多くなっており、それ以降は週1時間と週2時間の割合が均衡を保っている状況である。また、週3時間以上の活動を行っているチューターは、研究や実験指導のサポートを行っている農学部や医学部の学生であった。

表4. 週当たりの活動時間数（チューター）

年度(人数)／時間	1時間未満	1時間	2時間	3時間	4時間	5時間
2012年度第2学期 (36名)	4 (11.1%)	15 (41.7%)	12 (33.3%)	4 (11.1%)	1 (2.8%)	0 (0.0%)
2013年度第1学期 (45名)	2 (4.4%)	14 (31.1%)	19 (42.2%)	6 (13.3%)	4 (8.9%)	0 (0.0%)
2013年度第2学期 (46名)	5 (10.9%)	21 (45.7%)	17 (37.0%)	3 (6.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
2014年度第1学期 (36名)	5 (13.9%)	16 (44.4%)	12 (33.3%)	3 (8.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
2014年度第2学期 (46名)	3 (6.5%)	16 (34.8%)	21 (45.7%)	4 (8.7%)	1 (2.2%)	1 (2.2%)
2015年度第1学期 (29名)	2 (6.9%)	16 (55.2%)	10 (34.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (3.4%)
2015年度第2学期 (14名)	0 (0.0%)	8 (57.1%)	4 (28.6%)	2 (14.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
平均	3.0 (8.3%)	15.1 (42.1%)	13.6 (37.7%)	3.1 (8.7%)	0.9 (2.4%)	0.3 (0.8%)



グラフ2. 週当たりの活動時間数（チューター）

3.3 チューター指導の内容

2012年度第2学期から2015年度のチューター活動がどのような内容で、どの程度行われたのかを終了時のアンケート調査から概観してみる。2006年度第2学期におけるチューター指導の分析から、①「専門の指導」、②「日本語の指導」、③「生活上のサポート」、④「相談・話し相手」、⑤「その他」の5点が抽出されたため、この5点の活動がどの程度行われているのかを学部ごとに見ていく。

表5. 2012年度第2学期～2015年度におけるチューター指導内容（学部別）

学部(人数)/内容	専門の指導	日本語指導	生活	相談相手	その他
人文学部(79)	20.8	33.9	19.1	25.0	1.2
教育学部(99)	21.8	38.5	17.3	20.8	1.6
理学部(25)	40.3	24.2	17.8	15.6	2.2
医学部(3)	56.7	11.7	21.7	10.0	0.0
農学部(19)	48.1	23.3	17.2	11.4	0.0
土佐さきがけプログラム(7)	15.6	47.4	12.0	24.0	1.0
黒潮圏海洋科学研究科(1)	40.0	10.0	30.0	20.0	0.0
平均	34.8	27.0	19.3	18.1	0.9

表5は学部ごとのチューター活動の内容を表にまとめたものである。この表を概観すると、文系と理系の学部で所属している留学生の属性が異なるため、チューター活動の内容もそれに伴って異なっていることが読み取れる。全体の平均としては、「専門」、「日本語」、「生活」、「相談」、「その他」の順になっている。しかし、文系の人文学部や教育学部、土佐さきがけプログラムは正規生及び短期の交換留学生を数多く受け入れている関係上、「専門」、「日本語」、「生活」、「相談」等それぞれのサポートが満遍なく行われているが、「日本語指導」の時間に最も多くの時間がかけられ、次に「相談」の割合が2割以上占めていることが分かる。このことから、チューターは最も身近にいる先輩であり、気軽に相談できる友人としての役割が重要であることが見受けられる。アドバイザー教員には相談できないような悩みや質問も同じ学生であるチューターには相談し、信頼関係を築いていることがうかがえるためである。また、短期の交換留学生は、来日の目的が日本語の習得及び異文化交流であるため、チューターの指導内容においても日本語習得及び友人としての交流という役割が主となっていることが考えられる。

一方、理系の理学部と農学部では、正規生や短期の交換留学生が多く、研究や専門の指導に費やす時間が4割を超える半面、「日本語指導」に費やす時間も2割を超えている。また、医学部と黒潮圏海洋科学研究科では、正規の大学院生が多く、研究室での研究や実験指導のサポートにかかる時間が4割を超えているが、英語での指導が主となるので「日本語指導」の時間は少なく、「生活」のサポートとしてのチューターの役割が2割を超えている状況である。

このように、文系と理系の学部ごとの特性はあるものの平均値を見ると、「専門」と「日本語」の指導に費やす時間が6割を超え、「生活」に費やされる時間が約2割である。これは、入学直後の生活をサポートをする「渡日時チューター」と学期を通して学習指導を行う「個別チューター」とがある程度役割の分担がなされ、学期を通して継続的に研究や学習のサポートが行われていることを意味している。2006年度の第2学期の調査では、農学部のチューターは専門・実験指導に割かれる時間と生活上のサポートに割かれる時間がほぼ同等であり、生活上のサポートが42.7%を占めていたが、前回の2013年の調査と同様、「専門」及び「日本語」の指導が6割以上を占め、重点が置かれているポイントがシフトされていることが分かった。なお、「相談・話し相手」としてのチューターの役割は全体の平均で18.1%であり、学習や日本の生活上のアドバイスや異文化交流の面でもチューターがサポートしていることがうかがえる。

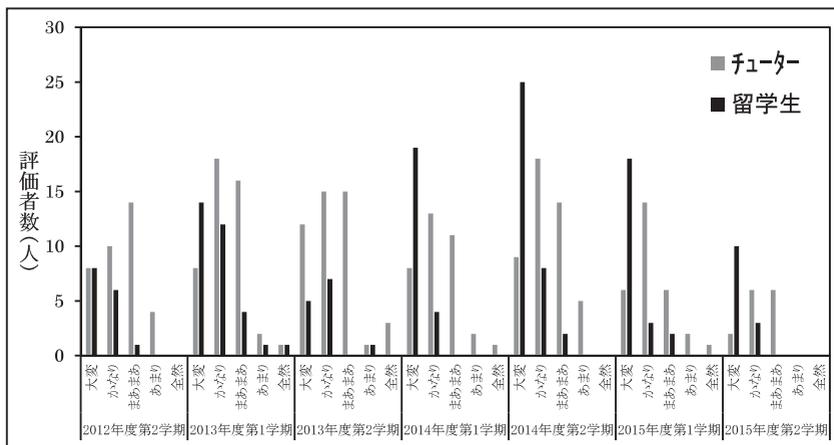
4. 2012年度第2学期から2015年度におけるチューター活動のアンケート結果

2012年度第2学期から2015年度にかけて実施したチューター活動報告書をチューター及び留学生に分け、チューター活動における満足度及び問題点を分析していく。今回の調査では、チューター活動に対する評価として「チューター活動の満足度」の5段階評価及び「チューター活動で困ったこと、難しかったこと」の自由記述欄を対象とした。7学期間でチューター251名(回収率74.0%)、留学生154名(回収率45.4%)、合計405名分(回収率59.7%)のデータを集計したものである。

4.1 チューター活動の満足度

グラフ3を見ると、チューター活動の評価において留学生の評価は、チューターの評価に比べて相対的に高くなっていることが分かる。留学生の「大変

満足」、「かなり満足」という肯定的な回答は8割程度を占めている。2012年度第2学期から2015年度までのチューターの平均は3.69で、留学生の平均は4.64であり、留学生はチューターの指導に対する満足度が相対的に高いことが明らかになった。これは、2008年度第2学期以降の調査結果と同様の傾向を示している。また、留学生のチューター活動への満足度は2008年度以降の調査を概観すると、徐々に上昇してきており、最大活動時間枠が減少しているにもかかわらず、満足度の高いチューター活動が行われていることがうかがえる。チューターの評価は「大変満足」、「かなり満足」との回答が6割程度であり、やや低いのは、自己評価であるため謙遜の気持ちが働いたことに加え、留学生への指導に対して明確な達成感がなく、試行錯誤しながら活動に当たっているためだと考えられる。



グラフ3. チューター活動の満足度*の変化 (チューター・留学生)

*満足度は5「大変」、4「かなり」、3「まあまあ」、2「あまり」、1「全然」の5段階で評価している。

4.2 チューター活動の問題点

チューター活動時の問題点としては、2013年の調査で抽出されたのと同様、チューターにおいては主に表6の7点が挙げられる。チューターが困難に感じている点としては、主要なチューター活動として位置づけられる「日本語指導」に困難さを感じているとの回答が最も多かった。これは、人文学部や教育学部の特別聴講学生(交換留学生)を担当しているチューターで目立ち、

専門科目のレポートの添削や発表のレジュメ等の作成において間違えを修正することはできても、日本語の文法やことばの微妙なニュアンスの違いを説明することができないという日本語指導の専門性が問われる問題である。次に、「時間調整の難しさ」が続くが、チューターが3・4年生である場合、就職活動で忙しかったり、他の学年でも授業時間やアルバイト、部活動の関係上、時間の確保が難しく十分な時間が取れなかったりするという問題点が挙げられる。また、チューター活動の時間を「チューター指導計画書」作成時に決めていても、留学生が直前になりキャンセルしたり、連絡が取れなかったりするという問題も挙げられた。さらに、「専門のサポート」の困難さとしては、チューターが同じ研究室の先輩であっても専門分野が異なり留学生の質問に回答できないといった問題である。その次に、「ことばによるコミュニケーション」の困難さであるが、これは、特に農学部や医学部のチューターが多く、自身の英語力不足及び留学生の日本語力が低いことによるコミュニケーションの困難さに起因する。そして、「指導内容や指導の範囲」が明確に分からなかったり、留学生が大学教育に必要な知識をすでに身につけており、特にチューターの必要性を感じていなかったりし、どのようなサポートを行えばよいのか、悩んでいるチューターの姿が浮かび上がった。その他、「留学生との距離感」として、チューターとしてなのか、友達としてなのか、どのような距離感で接すればよいのか、チューター活動を円滑にしようと共通の話題作りに苦労している様子もうかがえた。

表6. チューター活動時の問題点（チューター）

問題点の カテゴリー	2012年度	2013年度		2014年度		2015年度		計
	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期	
① 日本語指導	12	7	16	8	14	11	2	70(27.7%)
② 専門の指導	4	6	2	9	7	4	4	36(14.2%)
③ コミュニケーション	10	7	8	2	6	1	1	35(13.8%)
④ 理解のずれ	0	1	1	1	0	0	0	3(1.2%)
⑤ 手続きサポート	0	0	0	0	1	0	0	1(0.4%)
⑥ 時間調整	7	5	6	4	9	7	1	39(15.4%)
⑦ 指導内容	2	8	1	3	5	2	1	22(8.7%)
⑧ なし	2	4	7	6	1	3	4	27(10.7%)
⑨ その他	2	8	3	4	3	0	0	20(7.9%)
計	39	46	44	37	46	28	13	253(100%)

表7. チューター活動時の問題点（留学生）

問題点の カテゴリー	2012年度		2013年度		2014年度		2015年度		計
	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期		
① 専門の学習	1	1	1	1	4	3	4	15(9.0%)	
② コミュニケーション	6	9	1	3	5	0	1	25(15.0%)	
③ 理解のずれ	0	0	6	0	0	0	0	6(3.6%)	
④ 時間調整	0	5	3	1	3	1	0	13(7.8%)	
⑤ 指導内容	2	15	1	0	1	0	1	20(12.0%)	
⑥ なし	7	3	5	18	20	22	7	82(49.1%)	
⑦ その他	0	0	1	1	3	1	0	6(3.6%)	
計	16	33	18	24	36	27	13	167(100%)	

表7には留学生が感じるチューター活動時の問題点として、主に5点が挙げられている。留学生は「ことばによるコミュニケーション」が最も多く、次に「指導してもらった内容」、「専門の学習」、「時間調整の難しさ」、「文化の違いによることばの理解のずれ」の難しさが続く。

留学生の約半数が問題なしと回答したのに対し、チューターの90%弱が何らかの問題点を感じており、特に「日本語指導」、「時間調整」、「専門の指導」、「コミュニケーション」に困難を強く感じていることが明らかになった。

5. 2012年度第2学期から2015年度におけるチューター活動の考察

高知大学におけるチューター制度がチューター及び留学生にとってどの程度効果があるのかをチューター活動終了後のアンケート調査を通して検証してきた。その結果、2013年の調査と同様、学期を通して行われる「個別チューター活動」は、入学後の生活支援として実施される「渡日時チューター活動」とは住み分けられ、人文・教育・理学部を中心に週に1、2度、1時間から2時間の学習・研究支援が定期的に行われていることが分かった。2006年度のチューター制度改善前には、1学期間に1回だけしかチューター活動を行わない者や数日間のチューター活動で全ての活動時間枠を消化するチューターが2割程度みられたが、今回の調査ではそのような傾向は見られず、それぞれのチューターがチューター活動を開始する際に提出する「チューター指導計画書」に基づき活動していることが実証された。このことから、チューター制度の運用が概ねスムーズに行われていることが見受けられた。

しかし、研究や実験指導を中心にチューター活動を実施している農学部や医学部のチューターの中には、週に5回以上、3時間以上のチューター活動を行っている者もあり、学部によっては活動時間枠が少なすぎる設定になっている感も否めない。また、2010年度当初まではチューター活動時間が最大40時間であったのが、2011年度以降は20時間にまで減少された。それに伴い、チューター及び留学生の満足度は際立った変化がなく、留学生のほうがチューターよりも高い評価を下していたこと、微増ながら満足度が上昇していることから、チューター活動の質は保たれていると考えられる。

一方で、「外国人留学生支援基本計画」(2011)⁶⁾によると、「チューターによる指導については、回答者全体の約60%が、満足またはまあ満足と回答しているものの、約12%は、少し不満または不満と回答している」とある。さらに、「チューターによる指導で不満と思う点としては、『会うチャンスがあまりなかったこと』、『言葉が通じなかったこと』が挙げられている」。このことから、チューター活動終了後のアンケートを提出した学生は、それなりのチューター活動をした学生であり、提出しなかった学生の声が十分に拾えていないということが考えられる。2008年度からチューター活動終了後のアンケート調査結果のチューター及び留学生の満足度に変化がないという状況から、チューター活動に不満をもらしている留学生は、チューター活動終了後のアンケート調査を提出する前に何らかの理由でチューター活動に支障をきたし中断してしまったか、あるいは不満をもらしながらもアンケートを提出せず、アンケートの集計結果に表れてこないことが予想されるからである。

さらに、チューター活動は、学部生の場合、入学後2年間、大学院生や特別聴講学生(交換留学生)等は1年間利用可能であるが、チューター業務は、留学生が卒業(修了)に至るまで勉学や生活への適応支援ができるわけではない。チューター活動は、あくまでも留学生が専門分野の勉強に支障をきたさず安心して取り組めるようになるためのサポートであって、留学生本人にとって必要な支援なのかどうかを考慮しながら留学生の将来を見据えて進める必要がある。

今後は、アンケート調査には表れない留学生の声なき声も拾い上げられるような支援体制の構築を目指すとともに、チューター活動の予算が限られている中でのチューターの質の向上として、チューターオリエンテーションや講習会でチューター制度の教育的意義やチューターの心得を理解させていく必要性を感じる。また、今後も日本人学生が留学生と接触することにより、

自らも様々なことを学び、国際理解への関心を高める良い機会になるというチューター制度を通して留学生支援及び日本人学生の海外留学支援の一助としていきたい。

6. おわりに

高知大学におけるチューター制度を通して、留学生の支援体制の構築について考えてきたが、「留学生教育のあり方懇談会最終報告書」(2010)⁷⁾においては、「留学生の受入れを円滑に行うための全般的な事項」として、「留学生の受入れに関する教職員の理解が大きく不足していることが挙げられる」と述べられている。その改善方法としては、「1)一般学生にとって国際性や社会性を養うのに不可欠な外国人留学生の存在の明確化、2)外国人留学生の受入れにおける利点や意義に対する教職員の認識の共有、3)協定校からの交換留学における全学的な受入れ体制の構築」の3点が挙げられている。

このように、外国人留学生の支援体制を構築するためには、大学全体の受入れ体制作りを強化し、留学生に対する支援体制に関する目的を明確化した上で共有し、一つ一つの問題を解決していくという地道な基盤作りが重要である。

注

- 1) 高知大学総務課(2016)『高知大学概要』p.46
- 2) 2006年度から2008年度に行われたチューター制度の改善策の詳細は、大塚薫(2010)「高知大学におけるチューター制度の現状及び課題」を参照されたい。
- 3) 2011年度から行われている「チューター講習会」の詳細は、大塚薫(2013)「チューター制度の構築における課題—アンケート調査結果からの検証—」を参照されたい。
- 4) チューターを留学生のアドバイザー(指導)教員が選定する際には、チューターの教育的意義も考慮し①原則1対1で指導に当たること、②日本人学生であること、③外国人留学生がチューターになる場合は、原則院生であること、④対象留学生が院生の場合、同じ研究室の院生が望ましいとしている。しかし、渡日時チューターは、一通り渡日時の諸手続きを経験した留学生が担当することも多い。
- 5) 地域協働学部は、2015年度から新設された学部である。
- 6) 高知大学総合教育センター・修学・留学生支援部門(2011)「外国人留学生支援基本計画—高知大学の外国人留学生における学習面及び生活面の課題—」p.6

- 7) 高知大学留学生教育のあり方懇談会(2010)「高知大学留学生教育のあり方懇談会報告書」p.5

<参考文献>

- 大塚薫(2010)「高知大学におけるチューター制度の現状及び課題」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』第4号、高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門、pp.121-138
- 大塚薫・林翠芳(2012)「『留学生30万人計画』に基づく外国人留学生に対する支援体制の構築－高知大学の事例を中心に－」『日本語教育研究』第22輯、韓国語教育学会、pp.135-148
- 大塚薫(2013)「チューター制度の構築における課題－アンケート調査結果からの検証－」『高知大学留学生教育』第7号、高知大学国際・地域連携センター国際連携部門、pp.83-102
- 高知大学国際連携推進センター(2015)『チューターガイドブックーよりよいチューター活動とはー』高知大学国際連携推進センター
- 高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門(2011)「外国人留学生支援基本計画－高知大学の外国人留学生における学習面及び生活面の課題－」高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門
- 高知大学総務課(2016)『高知大学概要』高知大学総務課
- 高知大学留学生教育のあり方懇談会(2010)「高知大学留学生教育のあり方懇談会報告書」高知大学留学生教育のあり方懇談会
- 名古屋大学国際教育交流センター(2017)『国際教育交流担当者のためのガイドブック2017』名古屋大学国際教育交流センター
- 林翠芳・大塚薫・渡辺春美(2009)「高知大学における『留学生30万人計画』の推進－現状及び課題－」高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要、pp.103-117

おおつか かおる

(高知大学国際連携推進センター国際連携教育部門准教授)